

## Part 1

### 1643年にオランダ人が作成した北海道の古地図

#### スライド 1

2013年の4月に、根室で「東西の古地図にみる日本・北海道・千島」展という展覧会があり、私も見に行ってきました。さまざまな古地図を公開されたのは、北構保男さんという考古学・民俗学者で、以前畜大で法学を教えておられました北構太郎先生のお父様です。

#### スライド 2

この図は1658年にオランダで発行されました世界地図の日本の部分を示したものです。

たくさんの資料が公開されていて驚いたのですが、そのなかで、この地図は北海道の一部がきちんとした測量によって描かれた最初の地図であると言われております。しかし、濃霧の影響で十分な測量ができず、北海道、サハリン、国後島をひとつながりの陸地として描いておりました。また、北海道南部と本州の東北部が欠落しております。

#### スライド 3

この図は上記の古地図の北海道の部分を拡大したものです。地名をよく見ますと、Tacapsy と記載されているところがあります。これはおそらく十勝のことを示しているものと思います。

また近くに Sirarca という地名もあり、これは白糠を意味しているのと思います。これらの地名は実際にアイヌの人たちに会って記録したことが、調査者の航海日記によって明らかにされています。

日高山脈と思われる山脈も Snee Geberche (雪の山脈) として表してあります。北方の山は Blawe berg (青い山) と表してあります。これは阿寒、屈斜路、摩周などに該当するのでしょうか。

#### スライド 4

これらの地図の基となる調査航海を 1643 年に行ったのはオランダの東インド会社の船長 M. G. フリースでした。そのデータをもとに、ヤン・ヤンソニウスという人がアムステルダムで 1658 年に「日本・エゾおよび周辺諸島図」という地図を発行しました。

#### スライド 5

根室の古地図展で資料を全て提供された北構保男さんは、「一六四三年アイヌ社会探訪記 ― フリース船隊航海記録 ―」という本を書かれています。

フリースはオランダの東インド会社に所属した船長で、1643 年に、「金と銀の島」を探索する目的で北海道周辺から樺太までを往復航海した人です。途中ウルップ島も調査し海峡も発見しました。樺太の「海豹島（アザラシ島）」も発見しました。

航海の途中、十勝沖、歯舞諸島、国後島、樺太沿岸 2 箇所、厚岸に立ち寄り、アイヌの住民と交流しています。

アイヌの人たちは穏やか、かつ積極的で、フリース一行と心温まる交流をしています。

各地の地名もその時の会話を通じて聞き知ったようです。

#### スライド 6

当時日本は鎖国時代であったため、偶然会うことになった和人たちとはあまり良い交流ができなかったようです。

2 艦体制で調査に行ったのですが、副艦「ブリスケン号」の船長とその他乗組員 10 名は山田湾で宣教師と間違われて捉えられて江戸に送られ 5 ヶ月もの取り調べを受けました。フリースが乗った「カストリカム号」は 1 艦のみでその後の全ての調査を遂行し、帰国の途中でやっと「ブリスケン号」に会うことができました。

当時、日本にも詳しい北海道の地図はなく、アイヌの人々の民状についてもほとんど知られていなかったため、フリースらによる調査の価値は非常に大きかったと言えます。

北海道の形は 1700 年代後半以降、最上徳内、近藤重蔵、間宮林蔵、伊能忠敬らの調査によって次第に明らかにされました。

このように北海道は世界の先進国の人々や日本人にとってもつい最近まで未開の地でありましたが、実際は本当に未開の地であったのでしょうか。そこに住んでいた人々にとっては、豊かな大地で、世界で最も進んだ石器文化や縄文土器文化が栄えていた土地であり、日本の古代文化とも共通する側面があったと考えられています。

またオランダの航海者たちとの交流においては、当時最高の文明人たちにも臆することなく平和かつ友好的に接し、また女の子の頭にさわったり、アイヌ人墓標を探し出してもてあそんだ乗組員には厳重に抗議するなど、アイヌの人たちの高い精神性が示されていました。